

- (1) 田螺たにしの息子むすこ 話・片倉 舜さん 桃生郡(東松島市) 矢本町(大正十三年生) 頁
- (2) 一寸坊主いっすんぼうず 話・木村 一郎さん 登米郡(登米市) 米山町(明治四十二年生) 頁
- (3) ヘビしぞうの四蔵 話・青木 のゑさん 登米郡(登米市) 中田町(大正十二年生) 頁
- (4) うそ吹き太郎 話・伊藤 正子さん 登米郡(登米市) 迫町(大正十五年生) 頁
- (5) 瓜うりこ姫こ① 話・千葉 きみさん 栗原郡(栗原市) 築館町(大正二年生) 頁
- (6) うりこ姫② 話・鈴木 誠一さん 本吉郡(気仙沼市) 唐桑町(大正十一年生) 頁
- (7) 桃太郎① 話・佐藤しのぶさん 石巻市小積浜(大正十一年生) 頁
- (8) 桃太郎② 話・及川ちよいさん 本吉郡(気仙沼市) 小泉(明治三十五年生) 頁

(1) 田螺の息子

むかし、あつところろに、その日の竈の煙も立たないような、貧乏な百姓の夫婦があつたんだと。

長者どんの屋敷さ、朝早く行って働いて、その日その日の暮らしをたてていたんだと。おまけに子どももない子持たじな人たちだったんで、

「どんな子でもええ。わが子と名のつく子なら、蛇でもええ。何とかならんものか」

と、氏神さまにお願いしてたんだと。

かんかん照りつける夏の日のことであつたんだと。女房のほうは、長者どんの言いつけで、田の草とりに行ったんだと。煮えつくり返るような田んぼを這いずりまわって、田の草をとっていたら、急に腹コが痛み出したんだと。泥だらけのまま畔道で休んでいたが、痛みは激しくなるばかりで、とうとう我慢コもならず、背をかがめて、腹を押さえて、わが家へかけもどつたと。

板の間で、わらをかぶって、うんうんうなっている、となりの婆さまが、うなり声を聞きつけて来てくれた。すると、たまげた。

「腹病みじゃねえ。こいつあ、今からやや子（赤んぼ）が生まれるところだ」

あんまり思いがけないことで動転して、なじよしたらええかわからなかったんだと。

「願掛けがかなえられた。ありがてえこつた。どうか安産してける」

と、亭主は氏神さまに手を合わせて祈っていると、やがてやや子が生れたと。

なんと、それはたにしだったんだと。

「ものは考えようだ。たにしだつてわが子だもの、氏神さまの申し子だ。大事に育てべし」

ということになった。

それからというものは、この夫婦は以前にもまして氏神さまにお参りし、水や季節の果物を供えたりして、それはそれは信心を深くし、たにしを大事に育てていたんだと。

そうこうしているうちに、かれこれ二十年がたち、息子も二十になった。たにしの息子は、食い物は食うが、ものも言わず大きくもならなかった。

ある日のこと、年とった父親は、長者どんに納める年貢を馬の背中につけながら、

「切ねえこつた。氏神さまの申し子が授さずかったというものの、二十年たつてもたにしはたにし。口もきけねえたにしだ。一度でいいから、父とと、母かかと言うてくれ」

とこぼした。《愚痴を言った》んだと。すると、うしろの方でふいに声がした。

「父とと、そんじやおらが、きようはその米を運んでやる」

父ととは驚いて、あたりをきよるきよる見まわしたけれど、どういふものか人影もなかったんだと。

「おらと呼んでいるのは誰だれだ」

と言うと、

「おらだ、息子のたにしだ。父とと、今まで面倒かけたけど、きようからは、おれが稼くぐ」

父ととは、たにしがものを言い出したばかりか、しつかりしたことを言うので、腰を抜かさんばかりに驚いたんだと。

とにかく、大いそぎで、氏神さまの神棚からたにしを降ろし、言われたとおり、米俵をつけた馬の背中に乗せてやったんだと。

母かかもとんできて、

「あれや、あれや」

と言うばかりだったと。すると、たにしは、

「そんなら、父ととも母かかも行ってくるで」

ハイドウ、ハイドウ、まるで人が引くように上手に馬うまっコさばいて、家を出ていったんだと。父ととも母かかも、気が気でなくて、背伸びしてはあとを追い、あとを追つては背伸びしながら、見えがくれについて行つた。たにしは、

「ハーイ、ドウドウドウ」

と、馬うまっコさ言いながら水たまりを避け、橋ば渡つていったと。そればかりか、すきとおるようないい声で、

たにしどんや めでたいのう

愛宕参めえりにござらぬか

いで候そうろう いで候そうろう

と、ほのぼのと歌つていったと。馬うまっコもうれしいのか、よぼよぼの足をしゃんとさせ、首の鈴をシャンコ、シャンコと振りながら、長者屋敷をめざしてすすんでいった。

街道を行く人たちもたまげて、

「さてさて、あの馬はたしか貧乏百姓ひんぱんひやくしやうとこのやせ馬うまっこじゃ。歌っているのは、いったい誰だんべな」

と、ふしぎがった。

「あの様子ならば、何事もなく長者ちやうじやうどんどこさ行き着くべ」

「んだとも。氏神さまの申し子だもん」

父と母は、氏神さまにお礼を申し上げるやら、無事に行き着くようにお頼みするやら、お灯明をつけ、手を合わせて一心に拝みつづけた。

たにしの息子は、そんなことには無頓着で、馬を御して長者どんどこへ着いたと。

「それ、年貢が来たぞ」

下男たちがぞろぞろ出てきたが、立っているのは馬ばかりで、人の姿は見えなかつたぞ。

「はて、馬子がないがどうしたんだべ」

と言いつつ合っていると、

「おら、ここだ。たにしだ。おらの体をつぶさねえように降ろしてくんろ。それ、その縁側にでも置いてくる」

と言う声がする。

見れば、馬つこの首にたにしが一つちよっこりと乗って、それが一人前にものを言っていたんだと。下男たちは驚いて、

「旦那さま、旦那さま。たいへんですが」

「何をそんなにあわてるんだ」

「たにしが、たにしが、米を運んできたんだでば」

長者どんも、

「なにっ」

と言つて、家の者と一緒に表へとび出してみた。ためつすがめつ見るけれど、たにしはたにしで、なんでもないように、「お出迎え、御苦労さま」

などと、言っていたんだと。長者どんは、

「いやいや、かねてからあの手間取りじいさまのところには、氏神さまの申し子というたにしがいるとは聞いてはいたが、こ

げに口をきいたり、働いたりするとは思わなんだ。ひとつ、と

つくりと話してみたいもんだ」

と、たにしの息子を家の中に入れて、ご馳走をした。

お膳の側まで、ころころ転がつていったたにしは、みるみる

うちにご馳走をたいらげ、

「あまつた分は、父、母にももらつて行つて食べさせんだから、

包んでくる」

と言つておる。長者どんは二度たまげて、どうでもこうでも、このたにしをわが物にしたくなつた。だが、こげな物言う宝物

を、たとえ貧乏じいさまとでも、むざむざ手放すまい。そこで

長者どんは大いそぎで考えて、

「たにしどん、たにしどん、おまえの家とわしの家とは、爺さ

まのそのまた爺さまの代からの出入りの仲だ。なんなら、わた

しの娘をひとり、おまえの嫁にやってもいいぞ」

と、切り出したんだと。

「それはほんとか、長者どん」

「ほんとじゃとも。二人の娘の、どちらかをおまえにやろう」

そう言つて、長者どんはたにしの息子とかたい約束をしてしまつた。

父と母の家では、帰りがおそいので心配して、家から出たり入つたりして案じているところへ、たにしが帰つてきた。

「父、母、長者どんの娘を嫁にもらうことにした」

何を言うかと、父も母も、話し相手にならなかつた。からかわれて気がおかしくなつたのかと、気にもとめずにいたものの、もしやと思つて、隣の婆さまに頼んで、様子ば調べてもらうことにしたと。長者どんの家から帰つた婆さまの言うことは、「嫁にやることは本当だが、二人の娘のうちどちらとも、まだきめていない」と。

こちら、長者どんの屋敷では上へ下へと大さわぎ。二人の娘をよんで、

「おまえたち二人のうち、姉でもいい妹でもいい、たにしんどころさ嫁にいつてける」

と言うと、姉娘は顔色をかえて、

「おら、やんだ」

と言うなり座をけつて、どたばたと部屋を出ていつてしまつた。

長者どんは、妹に向かつて同じことを言つた。妹娘は、

「たとえ相手はたにしじゃとて、約束は約束だ。おら、たにしんどこさ嫁にいぐから、心配しないでけらいん」

と、やさしく返事した。

長者どんの娘の嫁入りは、それは豪勢なものだつた。

婚礼も無事にすんで、堀立小屋でも、めんこい嫁ご来てからパアツとあかるくなり、はなやいで、家の中から父と母の笑い声が、はずんで聞こえるようになってきたんだ。

それにまた、金持ちの長者どんの娘だというのに、この嫁ごは働き者で、父さん、母さんと言つて、よう仕えたんだ。野良に出れば、このあたりの女房たちに負けずに精を出す。そんなときには、たにしの亭主を帯にはさんだり、腰に止ませたりして出ていつた。たにしは、氏神さまの申し子のことだけあつて、どんなことでも知らないことはなかつた。そんなふうだから、いつも二人は、ころころ笑つたり、はやり唄を歌つたりして一緒だつた。

そうこうしているうちに春が来て、愛宕さまのお祭りの日 came。花こも咲けば、鳥こも鳴く、うつとりするような祭り日であつた。

父と母は、嫁ごに祭りさ行くようすすめたんだ。嫁ごは、美しく化粧して、長持から着物を出して着た。田んぼで、泥

んこになっている嫁ごは、今日ばかりは、目もさめるばかりの  
天女のように変わったと。すっかり仕度したくができたところで、  
「おまえさまも一緒に参りすんべし」  
と言うと、

「連れてってくれるか。天気もいいし、ゆっくり見物してこよ  
う」  
そう言つて出かけたと。

嫁ごは、いつものとおり、亭主こてのたにしを帯の結び目に入れ  
て、道々も大声で話しながら行くと、すれ違う人たちは、

「あれあれ、見てみい。あんなにうつくしい嫁ごが、ひとり言  
をいって笑つておる。かわいそうに気が狂つたんだべかや」  
と、気の毒そうな目で、ひそひそ話で振りかえつて見るんだと。

「おら、わけあつて愛宕さまの門はくぐれねえんだ。ここで待  
つてるから、ひとりでお参りしてきてけろ」

と言つたんだと。嫁ごは、それならと、たにしを帯から出して、  
田んぼの畔あぜにおいたと。

「すぐにもどつてくるから、からすに食われねえように気いつ  
けてけさえん」

そして、小走りにお宮の石段ば登つていったんだと。

いそいそもどつてみると、たにしは畔にいなかったと。嫁ご  
は、息がつまって目まいがし、今にも倒れそうになったと。か  
らすにでもさらわれたか、それとも田んぼに落ちたかと、晴れ  
着をたくしあげて、田の中さ下りたんだと。四月になつたこと  
なので、田の中にはたたくさんのたにしがいたと。それを一つ一  
つ拾つてみるけれど、亭主こてはいない。拾つては捨て拾つては捨  
てる。それでもいなくて、嫁ごは、とうとう泣き出したと。

たにしどんや たにしどん

ちよろちよろ小川

泥んこ田んぼ

あっちゃこっちゃ

どこいった

きじやからす

とんでいけ

涙声で歌つて、こっちの田からあつちの田へ漕ぎまわるうち  
に顔にも泥がはねあがり、美しい着物いしよもすっかり泥にまみれ、  
見るかげもない有様ありさまだったと。祭りから帰る人たちは、

「きつねに化かされたんだべか」  
と、指さして笑つていったと。

田の畔にすわって、嫁ごは、愛宕さまの社やしろにむかつて、  
「どうしたらよかんべ」

と、手を合わせて拝んだんだと。それから、亭主こてのたにしがいなくなつたからには、いつそ死んでお詫びしようと、社やしろの裏の池にとび込もうと走り出したんだと。そして、池に入って、深みのほうへすすんで行つたんだと。

「なにをする」

そのとき、後ろから声がした。振りむいて見ると、そこには立派な身なりをした男が、にっこにっこ笑つて立っているではないか。

「おらの声に聞き覚えはないか。おまえの亭主こてのたにしだ」  
嫁ごは声も出なかつた。たしかに、亭主こての声であつたと。亭主こてのたにしに違いないが、たにしとは似ても似つかぬ、りりしい男であつたから、嫁ごは、たまげて男を見たんだと。

「おまえのおかげで、たにしから人間の姿になれたのだ。氏神さまと愛宕さまは、相入れなかつたのが、おまえの情け深さのおかげで、二人の神さまが仲なおりして、おれを人間にしてくれた」

と言ふんだと。

二人で連れだつて帰ると、父ととも母かかも、腰を抜かしてしまつたと。すぐさま長者どんのところへ使いが走つたと。みんな寄りあつまつて喜びあつたと。

それからというもの、夫婦心をあわせて働いたもんだから、堀立小屋の暮らしの家にも、やつと春がきたんだと。

たんと幸せがやってきて、やがて、名にしおう長者と言われ  
るまでになつたとさ。

えんつこもんつこ さげだどさ

語り手：桃生郡矢本町 片倉舜さん(大正十三年生)  
出典：宮城県文化財調査報告書第一三〇号

「宮城県の民話―民話伝承調査報告書―」

(2) 一寸坊主

むがし、あつたつとおんなあ。

お爺つあんとお婆つあんが暮らしていたんだと。お爺つあんとお婆つあんは、

「おぼこ《赤んぼ》欲しい、おぼこ欲しい」  
つて、神様さ拝んだんだと。

拝んでる内に百日がたつて、満願の日に帰つてくつとこしたら、社の中に赤んぼの泣き声したんだと。行つてみれば、めんこい赤んぼがいだがら、

「ああ、こいづは神様のさずかりだ」  
つて、二人で拾つてきて、うめえ物うんと食せて育したんだと、はつぱりおがんね《大きくなんな》がった。おがんねがら、一寸坊主と名づけだ。

あるどぎ、爺つあん、  
「一寸坊主、一寸坊主。貴様はなに食せても、はつぱりおがんねがら、暇けつから、ほしいものけつから出て行け」  
つて語つた。

「はい、はい」

「んでえ、なにほしいか語れ」  
つて言つたれば、

「お椀コほしい」

「お椀コ、なにすんだ」

「川なんか渡つどぎ、舟にして乗るんだ。あど《ほかに》箸ほしい」

「箸はなにする」

「櫂棒の代わりにして、川渡つどぎ使うんだ」

「あど、なにほしい」

「あど、針ほしい」

「針、なにすんだ」

「刀のかわりに腰さ差すんだ」

「そうが。んでは、くれつから行け行け」

ほうして、一寸坊主は泣ぎながらずうつと行つた。大きな川あつたがら、お椀コの舟に乗つて、むこうさ漕いで島さ行つた。

その島さ行つたれば、りっぱな神様あつたがら、そごさ拝んで休んでいたれば、お姫様が家来達をつれで、神様を拝みさきた。

拝んで帰っどぎ、山から鬼が出はってきて、そのお姫様食うどごした。そこで、一寸坊主はとびだしてって、

「この鬼ども、なにするーっ。おれが勝負すつとー」

って、あばれて出はったれば、青鬼きてパクツと食ったんだと。

んでえ、一寸坊主、鬼の喉のどごさ行つてがら、ジグジグと針で突ついただれば、青鬼は、

「ハクシヨン」

って拍子に、一寸坊主は鼻がらペロツと出てきた。さあ、ほの次、

「この鬼ども、まだいだがー」

ってあばれだれば、こんどは赤鬼きてパツクリ食った。こんどは喉とおって腹まで行つて、腹ジグジグと突ついただれば痛ぐなうって、ごろごろ転んで、ほうして鬼は死んでしまった。一寸坊主、口から出はって、

「この鬼ども、まだがーっ」

って叫んだれば、あどは鬼どもがみんな山さ逃げでつた。

逃げでぐどぎ、延命小槌なげでつたと。

ほうしている内にお姫様だの家来達だのが、木のかげから出はってきて、

「あんだのおかげで命助かったから、おら家さおいでてくない」  
って言わって、一寸坊主はお姫様につれらいでお城さ行つたんだと。

殿様、出はってきて、

「ああ、おまえのおかげでおら家の娘助かったんだがら、おまえは命の恩人だ。おら家にながく居でくないん」

って、鬼がなげでつた延命小槌で、殿様、

「一寸坊主。おがれ（大きくなれ）、おがれ」

って、頭の上でふりまわしたれば、一寸坊主は忽ち大きくなつて、立派な侍になつた。

ほうして、一寸坊主はお姫様の旦那殿になつて、しまいにはお城の殿様になつて暮らした。

えんつこもんつこ さげだど

語り手…登米郡米山町 木村一郎さん（明治四十二年生）  
出典…宮城県文化財調査報告書第一三〇号

「宮城県の民話―民話伝承調査報告書―」

### (3)へびの四蔵しぞう

むかしむかし、ある村に、信心しんじんぶか深くて働き者の、おどつつあんとおがつつあんがいたんだと。ふたりでしあわせに暮くらしてたげんとも、子どもが授さずからねえんで、さびしくてなんねかっただと。それで、村むらのお八幡はちまんさんに、願がん掛けて、「なじよなわらしコでもええから、どうか授さずけてけえんと、ねがったんだと。」

三七さんしち、二十一日にじゅういちのあいだ願がん掛けて、いよいよ、きょうは満願まんがんという日ひのことだった。長いひげを生はやした神かみさんがあらわれ、

「わらしコ欲ほしかったら、この晒さらしコ腹はらさ巻まいでおけっ」といって、晒さらしよしたんだと。

おがつつあんは、すっかりうれしくなって、その晩ばんから、ぎつちりと晒さらしを巻まいて寝ねてたんだと。

ところが、十月とつきたつても腹はらはさっぱりふくらんでこねえんで、心配しんぱいになってきた。

ほんでまた、神かみさんさ参まるべとしてたら、しやなすに≪いきなり≧腹はらがいたんできたんだと。

「さあ、わらしコ産うまれるど」

と、待ちかまえてたら、人間にんげんとは似にても似につかぬへびの子が、ぼろりと産うまれてきたんだと。おどつつあんとおがつつあんは、たんまげてしまつて、

「なじよしたら、えがんべなあ」

と。うんとまよつたげんとも、

「なじよなわらしコでもええからと神かみさんに願ねがつて、授さずかったへびの子だ。大事だいじに育そだてつべ」

と話はなしあつて、へびの名なを四蔵しぞうとつけたんだと。そして、そつこりと育そだててたんだと。

へびの四蔵しぞうは、日に日に大おつきくなって、たちまち部屋へやの中に隠かくしきれないほどに、生せい長ちようしたんだと。

おどつつあんとおがつつあんは、かわいそうでなんねかっただげんとも、このままでは世間せけんに知られて殺ころされてしまうにちがいないと思おもつて、四蔵しぞうを山やまにすてることにしたんだと。

月の明あるい晩ばんに、二人ふたりは四蔵しぞうをつれて近くちかくの山やままで行いったんだと。

「四蔵しぞうや。世間よこの手前てまえがあつて、いつまでもおまえを家いへさ置おくわけにいかねえんだ。ときどき来てみつから、達者たっしゃでいてけるな」

おどつつあんとおがつつあんに、やさしく言つてきかせられると、四蔵は悲しそうに頭を下げて、茂みのなかへ姿を消していったんだと。

それからしばらくして、村ではたいへんな騒ぎが持ちあがったんだと。わらしコだの、イヌだの、ニワトリだのが、毎晩のようにいなくなるんだと。村の人たちは、かわり番こで夜つびいてまぶつて《見張つて》も、なにもものが、いつのまにかさらつていくんだと。

このことは、とうとう殿さんの耳にまで入ったんだと。殿さんは、いろいろ考えたあげく、

「化け物退治した者には、千両つかわす」と、おふれを出したんだと。

おどつつあんとおがつつあんは、ずっと前から、「もしかすつと、これは四蔵の仕業でねえが」

と、心配してたんだと。そして、他人さまの手にかかつて、殺されるくれえなら、おれだちが殺したほうが四蔵にとつてもしあわせてねえか、と考えたんだと。

二人は、鉈をたんがえて《持つて》、山のなかを探してまわったんだと。

「四蔵やあ、四蔵やあ」

と呼んで、山じゆう探して歩いたげんとも、四蔵の姿は見えなかつたんだと。二人はあきらめて、とぼとぼ山を下りてきたつけえ、いまは大蛇のように大つきくなった四蔵が、山の下り口で、とぐろを巻いて待ってたつうんだ。

おどつつあんは、四蔵の頭をなでながら、「わらしコだの、イヌだの、ニワトリだの、さらつてつたのはおめえか」

ときくと、四蔵はがっくりと頭を下げたんだと。おどつつあんは、泣き泣き、

「他人さまに殺されるよりか、おれたちに殺されたほうが、おめえにもしあわせてねえがと思つて、二人して探しにきたんだぞ」

と言つて、鉈をふりあげたんだと。

四蔵はおとなしく頭を出したと。おどつつあんは、眼つぶつて、四蔵の首をひと思いに切り落としたどしや。

おどつつあんとおがつつあんは、四蔵の首を殿さんさあげて、千両の金をもらうと、立派なお宮を建てたんだと。そして、蛇王権現として、四蔵をねんごろに祭つたんだと。

こんで おひらぎおひらぎ

語り手…登米郡中田町 青木のゑさん（大正十二年生）

再話…小野和子

出典…「みやぎむかしばなし」

―オンチヨロチヨの穴のぞき―

東北放送・宝文堂

（昭和五十五年発行）

#### （4）うそ吹き太郎

むかあしむかし。

あつとこに、お父つあんとお母つあんとお母つあんとお母つあんとお母つあんとお母つあんと太郎という野郎つこの三人が住んでたつお。太郎つう野郎つこは、うんとうそ吹き  
《ほら吹き》童だつたつお。

春になつてね、お父つあんとお母つあんが、田仕事さ行つたんだと。

「太郎や、田打ちさ行つてくつから、もし、だれか来たら  
な、田さ行つたつて語れよな。ちゃんと留守居してろよ」

つて出ていったんだと。

「はい」

つて、太郎は一人で留守居してたんだつて。

しばらくたつたらね、お役人みでえな男の人が二人来たんだと。

「こんにちわ。お父つあん、どこさ行つた」  
つて聞かれたんだと。

「あのね、お父つあんは、お富士つあんが崩れそうだつて、麻幹三本持つて、突つ張りに行きした」

「したら、お母つあんはや」

「ああ、お母つあんすか。お母つあんはね、お空、綻びそう  
だつて、蚤の皮千枚、虱の皮千枚持って、綻び縫いさ行きし  
た」

「やあや、これやあ、なに聞いたつてだめだな」

つて、その人だちは、帰ったんだつて。途中まで行ってか  
らね、

「ほんでもやあ、あの野郎つこ、面白え野郎つこだなや。な  
んて語つかもう一回なにか聞いてみんべす」

つてもどつてきたんだと。

「やあや、兄つあんこや。先だ、お寺の釣り鐘ふつ飛ばされた  
んだげつとも、こつちの方さ、飛ばされで来ねがったが」

「ああ、来した、来した。あの長屋と便所の間のクモの巣さ引  
つ掛かつて、ガンガリ、ガンガリ、鳴つてたげつとも、いま、

どこさふつ飛んでいったかねえ」

つて語つたと。

「やあや、この野郎つこ、大したうそ語りだげつとも、面白  
え野郎つこだ」

つて帰つていったんだと。

晩方、お父つあんとお母つあんが帰つてきて、

「太郎、だれも来ねがったが」

「あの、お役人さまみでえな人が、二人来した。『お父つあん  
は、どこさ行つた』つて言うからね、お父つあんは、お富士つ  
あんが崩れそうだから、麻幹三本持つて、突つ張りに行きし  
た。『お母つあんはや』つて言うからね、お母つあんはね、お  
空綻びそうだからつて、蚤の皮千枚、虱の皮千枚持つて、綻  
び縫いさ行きしたつて語りした」

「なんだつて、そしたなこ言うんだべな。田さ行つたつて語  
れつて、あのくれえ言つたのになあ」

「そしたらね、いっぺん帰つたのにね、またもどつてきたんで  
がす。そんで、『お寺の釣り鐘、見ねがったが』つて言われた  
から、長屋と便所の間のクモの巣さ引つ掛かつて、ガンガ

リ、ガンガリ、鳴つてたげつとも、いま、どこさ行つたがねえ  
つて語りした」

つて言つたつとおね。

「なんだつて、お前は、そんなことばり、語んだべなあ」  
つて、お父つあんとお母つあんは、

「大きくなつたらなじよすんべや。とつてもこんな童、育て  
たつてわがねうちやや、少しこらしめねげえわがねえ」  
つて、二人で相談したんだと。

そして、一人息子ひとりむすこでかわいそうだけれども、海さ投げつか  
らつうことにしたんだと。ほだけれども、お母がつあんは、  
（ほだつてなあ、なじよなうそ語りかだつても、この童海わらわさ投  
げんの、もぞさげつちや「かわいそうだつちや」なあ）  
つて思つたんだと。

その晩は、餅もちの好きな野郎やろっこだから、うんと餅食かしえで  
やんべつて、餅搗ついてね、あんこ餅食かしえたんだと。それか  
ら、お父とつあんが、太郎どこ、莫蔭もくえんさぐるぐると包くるんだんだ  
と。お母がつあんはね、めんば「曲まげワツパ」さ、あんこ餅い  
つぺえ詰つめて、泣なぎながら莫蔭もくえんの中なかに入れてやつたつお。  
さあ、お父とつあん、背負しよつていったんだと。月明つきあかりがあら  
つたんだと。

お父とつあんは、海辺うみべの近くさ行いつて、高い崖たかいがきの上うへから太郎  
を包くるんだ莫蔭もくえんを、そつと転まがしてやつたんだと。ちようど途みち中  
の木の根ねつこさ引ひつ掛かかつてね、海うみさ落ちおちねがつたつお。  
お父とつあんだつて、本気まことで海うみさ投なげるつもりねえから、ぎ  
いっとも結ゆつけてねがつたんだべね。太郎は、莫蔭もくえんから、する  
するするつと抜ぬけ出でたんだと。そしたら、ごろつとめんばが出で  
はつてきたつお。開ひけでみたれば、あんこ餅もちがいつぺえ詰つまっ  
てたんで、太郎は、まだの、そこであんこ餅食かつたんだと。

そして、つぎの日ひ、顔中つらじゆうさ、あんこいつぺえ塗りぬりつけで、  
家けさ帰かえつていったつお。お母がつあんは、太郎は、海うみさ入いつて  
死しんでしまつたべつて、泣ないでいたもんだから、  
「あら、なんだつけやあ。ほんとに來こた。はつぱり來こねえか  
ら、海うみさ落ちおちて、死しんでしまつたと思おもつてた。良いがつたなあ、  
良いがつたなあ」  
つて、うんと喜よろこんだとな。

「その、顔つらなんだ」  
つて、お父とつあんが言いつたつつけえ、  
「なにね、お父とつあん。おらあ、竜宮城りゆうぐうじやうさ行いつてつしや。好  
きなあんこ餅もち、いつぺえ食かしえられまで來きした。とつても良いがつ  
たでばあ」  
つて言いつたつおね。

「なに、ほんとにが」  
「ほんとでがす。なあに、竜宮城りゆうぐうじやうつてどこね、うんと待まち遇いい  
から。お父とつあんが行いつたら、好きな酒さけつこいつぺえご馳走ちゆうそうに  
なりすべ」  
つて言いつたつお。  
「太郎。ほんとが」  
「ほんとでがす。おら、あんこ餅もち、うんと食くつてきたでば」

「ほだらば、おれも行ってみつかない」

「ほだら、お父つあん、おれ、連れていんから」

「って、こんどはお父つあんどこ、ぎりぎりどと莫塵で包んで、背負って行ってね、木もなんにもない高い崖の上から、ごろごろと、ほんとに落としてしまったんだとね。」

「さあ、お父つあんは、海さ、どぼーんと沈んでしまったんだと。」

「それから、何日かたつてからね、漁師だちが、死んで浮かんできたお父つあんどこ見たんだと。」

「なんだ、こいつは、太郎のお父つあんどこ」

「って、大騒ぎになったんだと。そして、」

「お父つあんどこ殺すような童、生がしてはおがれねえ」

「って、太郎は村の人だから、島流しにされてしまったんだと。舟さ乗しえられで、流されたんだと。」

「こんどこそ、太郎は帰ってこれねえ。いまごろなあ、鬼に食れでしまったべ」

「って、お母つあんは、毎日泣いていたつおね。」

「太郎は、流されるままに、ほんとうに鬼ヶ島さ着いたんだと。陸さがって歩いていったら、鬼だちが畑堀りしてたんだと。」

「あれ。これこれ、日本の兄つあんコでねえが。どこさ行くのや」

「どこつうこともがえん《ありません》」

「ほんだらばなあ、おら家で助けねがや。おら家では、年寄りおずんつあん一人で留守居してつから」

「って、さあ、鬼の家さ連れていかれたんだと。」

「毎日、若え鬼だちは稼ぎさいって、家には、八十になるおずんつあんと太郎と二人で、留守居してたんだと。」

「そしたら、その家の屋根の上に、小こい靴が一足あつたんだと。才槌《小型の木の槌》と、それから車つこのちつ小こいの。あと針が二本、長え針と短え針とあつたんだと。太郎は、おずんつあんに聞いたんだと。」

「おずんつあん、あそこの屋根の上にある車つこ、なにすんのつしや」

「ああ、あいつはな、ひと踏みすれば千里走る車だ」

「ほだら、あの、才槌はつしや」

「あれはな、ここさ大きな砂山できろつて叩ぐと、砂山できつし、大きな川できろつて言つて叩ぐと、大きな川できろんだ」

「ほだら、あの、針はつしや」

「あの針はな、長え方で突づく、死んでしまう。短え方で突づく、生き返るんだ」

「あの靴はっしや」

「あれはな、浮き靴って言ってな、あの靴を履ぐと、海の上でも、川の上でも歩けるんだ」

「って教えらったつお。」

「したら、太郎は、そいつ欲しぐなつたつおね。そして、お母つあんがいる家さ帰りたくなつたんだと。」

「（なんとかして、あいつ手に入れて、一日歩けば海越えて日本さ行くのえっちやなあ）」

「と思つたんだと。」

「あるとき、鬼だちが遠くの田さ稼ぎに行ったからね、（よし、このときだ）」

「と思つて、太郎は、」

「おずんつあん、酒っこ飲ましえすべが」

「って言つたんだと。酒っこ好きなおずんつあんだからね、」

「ああ、ええなあ」

「つうことになつたんで、大きな釜さ酒っこいっぺえ沸かして、」

「ほら、飲ましえ。もつと、飲ましえ」

「つて、うんと飲ましえたんだと。おずんつあんは、すっかり酔つぱらつて寝でしまつたつお。」

「（いまのうちだ）」

「と思つてね、屋根の上さ上がつて、車っこから靴から才槌から針から、みんな持つて逃げたんだと。さあ、一つ踏めば千里走る車っこさ乗つて逃げたど。」

「ところが、鬼だちに見つけられでしまつたつおね。」

「なんだ。あそこに行くのあ太郎でねえが」

「つうことになつて、鬼だちは、別な車っこさ乗つて追っかけできたんだと。太郎は、」

「（こごさ、大きな川できろ）」

「つて、才槌振つたら、大きな川ができたんだと。鬼だちがその川を渡るうちに、太郎は一所懸命走だけつとも、まだの、か」

「つつかれ『追いつかれ』そうになつたつお。それで、こんど」

「は、」

「（こごさ、大きな砂山できろ）」

「つて、才槌叩いたと。砂山だから、車っこで、なかなか登れねがつたんだと。」

「そのうちに、やっど浜辺に着いたのでね、さあ、車っこ才槌、よけいな物あつこどねえつて、そこさ投げて、こんだ」

あ、浮き靴を履いて、針二本持って、海の上を一所懸命走らんだとね。

そのうちに、鬼だち、浜辺さ追っってきて、

「こりや、太郎、待ってるおー、待ってるおー」

って叫んだつお。太郎は、海の上、うんと走らんだって。

そしたらこんだあ、鬼だちみんな海辺さ来て、海の水飲み

はじめたんだと。どくどく、どくどくって何人も来て飲まれた

から、太郎は後もどりしそうになつたんだと。それでも、なん

とか陸に着いたんだって。

それからね、浮き靴はいらねえからって投げて、針二本持

って、

(早くお母つあんに会いてえ)

と思つて歩いていったと。

しばらく歩いたら、立派な家があつて、その家の人だち

なんだもかんだもなぐ大泣ぎしてんのですね、

「なにしたのつしや」

って聞いたんだと。

「あのね。この家の一人娘が死んでしまったんで、泣いでんで

がす」

って語られたんで、太郎は、

(この針で突づけば、生きるって言ったつけな)と思つて、

「ほんで、おれが、その死んだ娘ば生き返してけっから」

って語つたつお。みんなは、

(だれえ、死んだ者、生き返されるんだつけえ)

って思つたげつとも、その家の人だちは、藁をもつかむ気持ち

だからね、

「ほだらば、とにかくあべ《行こう》」

って、死んだ娘のどこさ、太郎を連れていったんだと。

太郎は、死んだ娘のそば行つて、短え針で鼻の頭をつく

つと突づいたと。またもういっぺん突づいたら、

「うーん」

とうなつて、三回目突づいたら、すっかり生き返つたんだ

と。

さあ、大喜びされてね、お膳さいっぺえお礼の銭つこもら

つたんだと。

(人ば助けだし、これえ良がつた)

って思つてね、銭つこ背負つて、お母つあんどこさ行くべつ

て、歩いていったと。

そして、途中まで行ったられば、こんどは、道端さ馬っコ死んでたんだと。

(どりや、この馬っコ生き返して、おれ乗っていぐべ) 　　  
って、馬っコの鼻の頭、針で突づいたと。したれば息吹き返して、三回突づいたればね、ヒヒーンって起き上がったんだと。

そこで太郎は、その馬っコさ乗って家さ向かったと。ところが、畑で稼いでいた人だちがね、

「なんだなんだ、あの野郎っこの乗ってる馬っコ、おら家の馬っコだっちゃ」

「だれえ、死んだ馬っコ、歩ぐつうことあんめえ」

「ほだて、すつかり、おら家の馬っコだべや。やあや、兄つあん、その馬っコ、どこから連れてきた」

って聞いたつお。

「ああ、そこの道端さ死んでだの、おれ、生き返してきたんだがす」

って語つたれば、

「ほだべ、その馬っコ、いい馬っコで、うんと大事にしていたおら家の馬っコだから、おら家さ返してけねがあ」

「ああ、良がす」

って、太郎、馬っコ返したれば、お札に銭っこ、うんともらつたんだと。太郎は、いっぺんに、うんと金持ちになつたつおね。

その銭っこ持って、お母つあんのいる家さ帰つたれば、お母つあんがね、もう太郎は、鬼ヶ島で、鬼に食れで死んでしまつたつて、毎日毎日、泣いでたからね、眼つぶれてしまつたんだと。

そこで太郎は、お経を読んで、仏掛けしたれば、お母つあんの眼開いたつお。

それから、太郎は、銭っこいっぺえもらつたし、うそばり語つてだめだからつて、こんどはまじめに働いて、お母つあ人を助けで、一所懸命稼いだどつしゃ。

えんっこもんつこ さげした

語り手…登米郡迫町 伊藤 正子さん(大正十五年生)  
出典…みやぎ民話の会叢書第九集

「母の昔話」を語り継ぐ―登米郡迫町新田の民話―

(5) 瓜うりこ姫こひめ ①

むがしむがし、あつたつもねえ。

おじんつあんとおぼんつあんあつたと。

おじんつあんは山さ柴刈りに、おぼんつあんは川さ洗濯に  
いったと。おぼんつあんが川で洗いものをしてたれば、川のず  
うつと上のほうがら、どんぶらどんぶらと大きな瓜うり流れてきた  
と。

「あららら、たまげて大きな瓜うりつこ流れてきたつちやなあ」

と、杖つゑこでつーつと引っぱり寄せて、

「おじんつあんが山がら来たたら、ふたりでわけて食うべなあ」  
と、家いへさ持ってきたと。

そしてるうちに、おじんつあんが、

「ただいま」

と、帰かへってきたがら、

「ああ、じんつあま、じんつあま。まず川がら瓜うりひろってきた  
がら、煙草たばこ《ひと休み》ししやせ」

と、そうして、瓜うり、包丁ほうちょうで切きつたれば、中なかがらめんこい女おんな  
わらしが生まれたんだと。

「あらららあ、たまげてこれ、めんこい女おんなわらし生まれだ  
つちやなあ。おらも、この年としなつても子どもねえもの、んだ  
ら、大事だいじに育てんべし。まず、名前なまえなんにつけんべ」

「瓜うりから生うれたから、瓜うりこ姫こひめこにつけたらいがんべ」

と、そうして、瓜うりこ姫こひめこにつけて、大事だいじに育てたれば、だ  
んだんと大きおほくなつて、そこらへんに誰も並ならぶものねえくら  
い、きれいな娘むすめになつたんだと。

と、そして、こつちがら「嫁よめごにけらい」、そつちがらも  
「嫁よめごにけらい」つて、仲人なこうど来たんだと。おじんつあんとおぼ  
んつあんとして

「そうしたらば、どこさ嫁よめごにけんべなあ」

「ほだなあ。隣村りんそんの庄屋しやうやさまの息子むすこ、あの人は心持こころもちもいいが  
ら、あの人ひとさけだらいかんべ」

「ほだらまず、町まちさ行いつてなにか支度しど買かつてこなぐね」

と、そして、ふたりで瓜うりこ姫こひめこさ着いせる衣い装しやう買かいに町まちさ行いつた  
んだと。

「瓜うりこ姫こひめこや、瓜うりこ姫こひめこや。町まちさ行いつて、お前まへの支度しど買かつてく  
つから、誰たれ来たつて戸開かどけでわがねど」

「はいはい」

「よく留守くわししてろよ」

って、町さ行ったんだと。

そしたれば、瓜こ姫こ、機織りしてたんだと。

カラン パツタリ

カラン パツタリ

機織りしてたれば、そごさアミノジャクが来て、

「瓜こ姫こや、瓜こ姫こや。こご少し開ける」

「わがりえん ≪だめです≫、わがりえん。今日、おじんつあんもおばんつあんも町さ行って、『誰来ても戸開けでわがんね』

って言わつたが、開けることできえん」

「いいがら、少し開けでける」

って、ちよつとの隙間<sup>すきま</sup>つこさ、アミノジャク爪立てて、ぐりぐりぐりぐり戸を開げで入ってきたんだと。

そうして、瓜こ姫このどこ押さえつけで、みな着物ぬが

せで、裏の山の柿の木さ縛りつけてしまった。アミノジャク、

自分が瓜こ姫この着物着て、瓜こ姫こに化けて、機織りしてたんだと。

カタン コトン

カタン コトン

そうしたつけ、ほれ、おじんつあんとおばんつあんが帰ってきて、

「瓜こ姫こや、今来たぞ」

って言ったと。そんでもアミノジャク、

「ああ、よぐ来した。早がったねえ」

って、話し語りして、なんでかんで瓜こ姫こに化けてたんだと。

そしていよいよ、隣村の庄屋さまの息子の家さ、嫁ごにいく日になったんだと。庄屋さまの息子、迎え馬に乗ってきたんだと。

アミノジャク、瓜こ姫こに化けて、白い衣装<sup>いしよ</sup>着て嫁ご面<sup>づら</sup>して乗掛<sup>ぬりかけ</sup>さ ≪鞍にお嫁さんが座り、その両脇につづらを下げて鈴などで飾り付けをしている馬のこと≫乗っていったんだと。ずつと行つたれば、

瓜こ姫この乗掛<sup>ぬりかけ</sup>さ

アミノジャクが乗さつた

おら可笑<sup>おが</sup>し

ホーホケキヨ

って、ウグイスが鳴いたんだとね。そうしたつけ、ほれ、アミノジャク、

(なんだべ、あのウグイス。なんだりかんだり語るな)  
と思つていたつけ、なんぼかしたらまた

瓜こ姫こは、ようやくみんなに助けられて、庄屋さまさ嫁ご  
にいったんだとしゃ。  
こんでえんつこもんつこ さげだ

瓜こ姫この乗掛ぬりかけけさ

アマノジャクが乗さつた

おおがら可笑し

ホーホケキョ

語り手…栗原郡築館町 千葉きみさん(大正二年生)  
出典…みやぎ民話の会資料集NO・187(1986年)

記録…佐佐木邦子

つて鳴いたんだとね。

そうしたつけ、アマノジャク、着てた着物みな、綿帽子もな  
にも吹っ飛ばして、そのウグイスにかかんべつて、アマノジャ  
クの姿になつてしまつたんだと。

「これは瓜こ姫こでねえ、アマノジャクだあ」

つて、そこにいた人たち、みんなして押さえつけて

「瓜こ姫こ、なじよした」

つて、アマノジャクのこと責めたれば、

「裏の山の柿の木さ縛りつげえてだ」

つて言うんで、裏の山さ行つたれば、瓜こ姫こが裸にされて、

柿の木に縛りつけられて、泣いでたつたんだと。

(6)うりこ姫 ②

むがしむがしね。

あつとこにつしや、おじんつあんとおばんつあんあつたんだどつしや。

おじんつあんとおばんつあんは、とっても仲つコよくてえ、二人でいつも畑さ出てね、一所懸命せつせと働いていたんだどつしや。

あるときね、隣のおばんつあんがね、

「これつき、これつき、隣のおばんつあん。おらどこにねす、とってもいい瓜の種つコあんでござりすてば。よがったら持つておんなはつせ。蒔いでえみたらなじよでござりす」

つて言ったどつしや。おばんつあんは、欲しい欲しいと思つていたもんだがら、喜んでしまつてね、

「そんな、いい瓜の種だったらば、おらどこにねえんでござりすてば、ほんでえ、ぜひいただきてえもんでござりす」

「はい、はい。なにおらどこでいつぱあつから、持つておんなはれせ」

そう言われたので、おばんつあんは、喜んでもらつてきたどつしや。

そうして、五粒ばりの瓜の種コ、畑さ蒔いだど。そしたらば、大きな瓜コが

一本ね、ほかの瓜コよりも早く育ちよがつたんでえ、みるみるうちに大きくなつたんだどつしや。

おばんつあんはね、ずいぶん大きくなつたし、そろそろ食べごろだがら、おじんつあんにも食べさせつぺし、辺り近所さも配つぺしつて、

「せつかくだもの、種コもらつたどこさも、あげだらなじよだべねす」

つて、おじんつあんさ、きいたどつしや。

「そだあそだあ。もらつたんだもの、おら家いでばり食べるのもつたいねえがら、辺りさも配つてあげだらよがすぺえ」

つて、おじんつあん言つたど。おばんつあんは、その瓜を包丁で切つぺどしたんだと。そしたら、その瓜コがひとんでに、ぱつと二つに割れたので、

「不思議なこともあるもんだ」

つて。そうしたら、中からオギヤーオギヤーつて、めんこい女の子が出てきたどつしや。

おじんつあんとおぼんつあんは、子どもねえくて、孫、欲しい欲しいと思つていたどこさ出てきたもんだがら、その喜びようつたら、ほんとに大したもんだつたどっしや。

そんで、真綿まわたに包くるんでめんこいめんこいって、大事でえじに大事でえじに育てたどっしや。おぼんつあん、

「なんと名前つけたらよがんべね」

つて言つたら、おじんつあんが、

「瓜うりがら生まれたがら、うりこ姫ひめとつけたらなじよだべえ」

つて言つたど。おぼんつあんは、

「ああ、そりやいい。一番ようござりすね。んでえ、そうしすべ」

つていうごとで、うりこ姫ひめつていう名前つけたどっしや。

おじんつあんとおぼんつあんは、目まなこさ入れでも痛いたぐねえように、大事でえじに育てたんだけど、あるどき、遠とほくの畑はたけさ行いかなくてねんで、童わらわの足あしではとつても行いがれねし、年取としとつてるもんだがら、負おぶつて行くにも行いがれねし、そんでね、仕方ねえがら、家いへさ置おいでいくごとにしたんだと。そして、

「なじよしたらよかんべな」

つてうんと考えて、戸かどんどこに突つ張はりかたりして、出でられねえようにして、

「うりこ姫ひめやなあ。外とちがら誰たれよんでも返事こたへすんなよ。きつと、化け物かまかなにがだがらな。とつて食かれつと大變てえへんなこつたがら、絶対に返事こたへすんなよ。いつまでも行いがねがつたら、あれ、あそこの火ひ柄げの上うへさあがって、隠かくれでろ」

つて言つて、出でかけたど。

そうこうするうちに、やっぱり化け物かまが出てきたどっしや。

その化け物かまは、戸かどをガタガタして、中ちゆうに入いつてきて辺り探たづしたけんども誰もいね。いつつも、(あのうりこ姫ひめんどこ食たつてみでえもんだ)と思おもつてたもんだがら、夢中ゆちゆうになつて探たづしたどさ。

探たづしきれねえで、炉端いろはんどこさ腰こしおろしたれば、そこに栗くりコいっぺあつたどさ。その栗くりコ焼やいて食たべんべがなど思おもつて、火かさくべたれば、ばちはちんと跳はねだどさ。その跳はねだの、化け物かまには、(うりこ姫ひめが柄げさいだ)つて聞きこえたんでえねえべがね。まさか、栗くりコが、そう語かたるわけねえんだげんどもさ。

びつくりして上見うみたら、うりこ姫ひめのね、着物きものの裾すそが見みえたどっさ。

「ああ、あそごさいだな」

つて、化け物かまは跳はび上あがって、うりこ姫ひめんどごかつ攪さらつて逃げてしまつたどさ。

うりこ姫は、

「じんつあんー、ばんつあんー」

って、大きな声で泣いたけんども、遠くさ行っていねもの、分がるはずねえべえ。うりこ姫は、多分、山の中さ連れでいがつて食れでしまったんでねえべえかね。

おじんつあんとおばんつあんが帰<sup>けえ</sup>ってきて、

「うりこ姫やあー、うりこ姫やあー」

ってよんだけども、返事がねえ。

「さてさて、そんでは、化け物が来て、さらっていっただべ。

あと追っかけてみんべ」

って、二人で山さ行って探したげんども、影も姿も見えねがったど。

あんなに、大事<sup>でえじ</sup>に大事<sup>でえじ</sup>に育てた孫ば、とられでしまったがら、おじんつあんとおばんつあんとうんと歎き悲しんだと。

話は、こんで終わりつさ。

いつこまんま

語り手…本吉郡唐桑 鈴木盛一さん（大正十一年生）

出典…みやぎ民話の会資料集NO・五七（1986年）

記録 早坂泰子

(7) 桃太郎 ①

むかし。

あるところに、おじいさんとおばあさんがいでえ、おじいさんは山に柴刈りに行って木をとって、おばあさんは、川に洗濯に行ったと。

桃が、どんぶりこ、どんぶりこで流れてきたんで、おばあさんは、流れてきた桃を拾ったと。

家に帰って、切り板ばんの上にあげて、包丁ほいちょもって切ろうと思ったとき、桃、ちくつと割れて、中から男の子が出てきたと。桃から出てきたから、桃太郎さんと言ったと。

だんだん桃太郎さんが大きくなって、鬼が島に鬼退治に行くからって、

「おばあさん、きび団子作ってけろ」

って、きび団子を作ってもらって出かけたと。

そしたら、イヌが来て、

「桃太郎さん、桃太郎さん。どこさ行く」

って言ったんだと。

「鬼が島に鬼退治に行くんだ」

「俺も団子もらえば、お供すっから」

って、団子もらってお供したんだと。

そしたつけ、こんどキジが来てね、キジもそのとおり話して、きび団子もらってお供したと。

その次はサル。サルも団子ももらって、お供したんだと。

そして、鬼が島に、その三人と桃太郎さん行ってね、鬼を退治して、宝物をとって、車に乗せて戻ってきたんだと。

語り手…石巻市小積浜 佐藤しのぶさん（大正十一年生）

出典…みやぎ民話の会資料集NO・八三（1987年）

記録 西條 満枝

(8) 桃太郎 ②

むかし話だからね。

おじいさんとおばあさんが、ほれ二人暮らしで、おじいさんは山へ柴刈りにね、おばあさんは川へ洗濯にほれ行ってね。

桃が流れてきてね。ドンドコドンドコ流れてきたのをひろって、神さんさ上げておいて、おじいさんが帰ってきたとき、二人で、まず、いただくべと思ったら、桃がわれて、中から赤ちゃんが出てきたから、桃太郎とつけて大切に育おがしてね。

そしてやはり、大きおっくなったときやあ、鬼退治っていうんだかなんだか、そえなこと聞かせられたんだねえ。

そして、

「山さ鬼退治に行くから、おばあさん、団子作ってくれ」  
つつうことを言っつてね。

やはり、鬼退治さ行くうち、桃太郎さ家来ができて、ほれ、ついていくから、きび団子もらってね。

「桃太郎さん、桃太郎さん。どこさ行くんですか」

「鬼退治に行く」

「じゃ、わたしも連れていってくれ」

「じゃあほれ、連れて行くから」

「団子を一つくれ」

つて、連れていったのね。

そして、鬼が島へ、

「そら進め。そら進め」

つて行ってね、万々歳だったつてね、まず。

宝物を車さ積んで、イヌが引き、サルがあと押し、キジが綱引く、エンヤラヤつてね、ほれ。

そんでえんつこ まんまんさけたとさ

語り手…本吉郡小泉 及川ちよいさん（明治三十五年生）  
出典…みやぎ民話の会資料集NO・六十五（1986年）

記録 小野 和子